

## 大鷲白山神社の懸仏調査報告！

去る5月26日月曜日、雨が降りしきる中を、國學院大学名誉教授の椋山林継先生と白山比咩神社禰宜の寺本義弘氏、比咩神社博物館の女性職員の3人が、わが高鷲町の大鷲・鮎走の両白山神社所有の懸け仏調査に訪れた。高鷲側からは下谷神官、大鷲白山神社鍵元、鮎走白山神社鍵元、山田幸男氏、川尻斉氏そして馬淵旻修が対応した。そこで、昭和61年3月岐阜県教育委員会が発行した『岐阜県指定文化財調査報告書第29巻』から「白山神社の懸仏」を再掲して、会員が高鷲町にある県指定重要文化財の理解を図るために紹介します。

大鷲の白山神社に所蔵される懸仏48面は、もと高鷲村大字大鷲字前田向鷲見にあり見事な杉の社叢をもっていとされる白山神社の所蔵であったが明治41年に行われた神社合併によって、現在の大鷲白山神社に移管されたとされている。

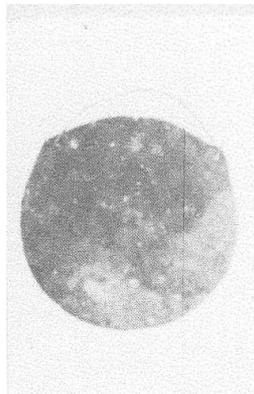
これらの懸仏群は、懸仏32面と残欠16面とに区分できるが、懸仏は銅製の円形板に半肉彫の仏像や天蓋、水瓶などを取り付け、裏板を付けたものであるが、すでにそれらが脱落したもの、破損したものが少なくない。また毛彫で尊像をあらわしたものの(NO1)や、尊像を墨書きしたものの(NO2)もみえる。

そして円形板の直径は、最大23.0cm、最小6.7cm、重量は最大345g、最小10gであるが、その尊像は、可能性のあるものも含めて、阿弥陀如来像8面、如来像2面、十一面観音菩薩像1面、菩薩像7面で、残る14面及び残欠16面は、破損や脱落及び摩耗のために、不詳といわざるえない。

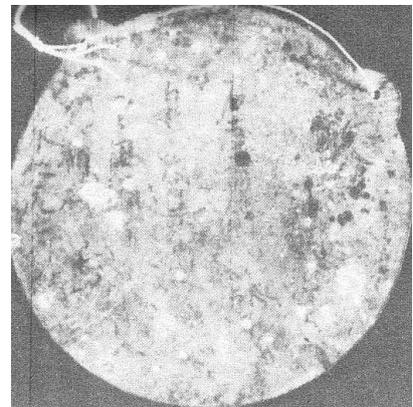
この懸仏群の作者は不明であるが、その製作年代についてはNO3の銅製円形板の裏面に「永仁癸巳年」(1293)という紀年銘が墨書されていて、現段階において、岐阜県内で製作年代の明らかな懸仏のうち、最も古い年代に属するといえることができる。しかし、これらの懸仏群は、いずれも鎌倉時代末から室町時代末にわたる製作とみられ、中世における信仰資料として、大きな価値があると判断することができる。また、この判断を椋山名誉教授も同意している。



NO1 毛彫の懸仏



NO2 墨書きした懸仏



NO3 裏面に紀年銘がある懸仏

# 町内文化財城山登山道清掃奉仕活動

6月12日(木)に高鷲町文化財保護協会は、郡上市指定文化財(史跡)である鷲見城址の清掃活動を行った。参加者は会員である山川直保市議会議員をはじめ、城主鷲見氏の末裔である鷲見尚武氏ら22名の参加者があった。

清掃活動は、向鷲見地区の城山登山道入口に各自が草刈り機、鉋、鋸、鋤簾、鎌などを持ち寄り、本丸跡までの約1kmの大手道や搦め手道の草刈りや倒木の除去、倒れた標柱の立て直し、側溝の清掃などの整備を行った。

作業終了後、本丸跡で、山田幸男本会顧問から鷲見城の歴史についての講話があり、会員は郷土の歴史の深さと郷土の魅力に改めて魅了された。ここで、昭和31年9月に高鷲村指定文化財になった鷲見城址について紹介します。



倒木を片付けるする会員

鷲見城は、鷲見郷を治めた鷲見氏ゆかりの城である。築城年代は定かでないが、「鷲見家史蹟」によると永暦元(1160)年初代鷲見頼保が築城したと、また「鷲見大鑑」によれば建長5(1252)年8月三代家保の晩年であると、さらにもう一説には承久の乱の頃に築城されたという説があるが、定説はない。しかし、麓から95mのところ(標高645m)にある鷲見城は、中世山城の原型を良く保たれ、慶長5(1600)年鷲見忠左右衛門が八幡城の戦いで戦死するまでこの地を治めた鷲見氏の居城であった。

城山東側の大手道からいくつもの出丸や曲輪跡等を経て本丸入口部分に着く。



本丸跡で鷲見城について話される山田幸男氏

ここは後代になって発達した枅形門の前駆的工法と考えられる形跡が有り、本丸曲輪は、東西54m、南北は西側14m、東側25mの四角形になっている。やや高くなっている西側に建物跡と思われる川石、東西両側に幅3~4mの土塁跡も見られる。なお、現在西の丸部分に鷲見神社が建立されている。

清掃活動本当にご苦労様でした。

## お知らせ

- 1 : 10月の高鷲町民祭では町内文化財の写真パネル展を今年から開催しようと考えています。ミズバショウや駒ヶ滝、夫婦滝など町内にあります文化財のよい写真がありましたら、出展してください。
- 2 : 10月27日(月)・28日(火)に宿泊文化財研修会を行います。本年度は若狭と琵琶湖周辺の文化財を訪ねる予定です。詳細は後日ご案内します。